



入谷清久 著

続 文学に現れた川崎大師

【書評】入谷清久著『続 文学に現れた川崎大師』
川崎大師遍昭叢書刊行会 A5判 二〇七ページ

著者である入谷清久氏（大正十三年生）は、元川崎市立幸図書館長であり、二十年以上にわたり川崎大師平間寺寺宝什物管理委員会専門委員を務めていた。そのような立場で、主に明治時代から以降の文学作品から、川崎大師を取り上げたものと、その作者について調べ上げ、解説したのが本書である。また適宜、その当時の新聞報道の内容も併せて紹介しているので、時代背景がよく理解出来、読者にとって便利である。

ところで、川崎大師の所在地は、川崎市（神奈川県）川崎区大師町である。私鉄京浜急行に乗れば、その名の通り川崎大師駅があり、そこを降りれば川崎大師と通称されている平間寺がある。ここは真言宗智山派の大本山であり、大治三年（一一二八）建立された。山号は金剛山。金乗院が院号である。紀州（和歌山県）高野山の尊賢上人を開山とし、平間兼乗を開基としているのである。

本書の内容は四十項目にわたっており、取り上げられた原典の写真が添えられたり、関連した景色もあれば、作者の顔写真とか、時には作者直筆の映像もある。以下、事例を少し挙げておこう。

芥川龍之介（明治二十五年〜昭和二年）が中学一年生時代に毛筆で書いた川崎大師方面への遠足を取り上げた作文「修学旅行の記」では、その達筆に驚かされる。また、特異な画家として知られた山下清（大正十一〜昭和四十六年）のスケッチ画「川崎大師」に添えて彼の文章「川崎のお大師様はどうしてたくさんのおまいりに来るか」というとおまいに來るといふことがあるという人が多いからだな。…」ほか紹介されている。昭和の小説家、大仏次郎（明治三十〜昭和四十八年）の「夏休み」という随筆では、母の実家のあった川崎大師近辺の昭和初期の風景が取り上げられているが、彼の実兄が星の文学者として知られた筆名・野尻抱影であることにも触れており、このことを筆者は初めて知った。

それ以外では、「川崎大師賛歌」を作曲奉納した国民的作曲家、古賀政男（明治三十七年〜昭和五十三年）の胸像が、信徒会館の正面に建てられた経緯と彼の直筆の楽譜も紹介されている。

本書の性格上、取り上げている人物の多くが川崎大師大僧正なのは当然として、彼らは学校教育や犯罪者の更生の組織化づくりに力を注いだりと、社会に大きく貢献した業績に紙数を費やしている。川崎大師が当地域で如何に大きな存在であるかを、言外に示している貴重な歴史書の役目も、本書は果たしているのである。（元島根大学法文学部教授）